

交流及び共同学習における取組例

県立姫路別所高等学校

活動の実際（単元名）

「交流及び共同学習の推進」

指導目標

- ① ノーマライゼーション社会の実現に向けた「共生の心」を育む。
- ② 姫路特別支援学校の生徒について、正しい認識を持つとともに理解を深める。
- ③ 交流及び共同学習において、個々の生徒に役割を与えることで個性を発揮する場をつくり、自尊感情や自己有用感を育成する機会とする。
- ④ 交流及び共同学習を通して、ソーシャルスキルの向上を目指す。

事前学習

- ・ 1 年生全員を対象に行う交流及び共同学習の拡充に取り組んだ。分教室側の受け入れ上限が20名であるため、残った20名に対して現代社会や一般教養に関する問題を両校の生徒がともに考える取組を行っている。両校の生徒がともに学ぶ機会が増えている。
- ・ 交流及び共同学習の事前指導として、1 年生全員が姫路特別支援学校分教室教頭の講話を聞き、障害に対する理解を深めた。

学習活動（具体的な取組）

ア 交流行事

4 月 対面式 5 月 交流学习・校内環境整備
 6 月 交流体育祭 7 月 合同防災訓練
 9 月 交流文化祭 10 月 親善スポーツ大会
 11 月 ひめよう祭・交流学习
 12 月 合同防災訓練・防災教育・ウィンターコンサート

1 月 震災追悼行事

2 月 マラソン大会・耐寒登山・卒業式

イ 授業

- ・ 分教室の生徒が本校の授業（情報・芸術・体育・家庭科・現代社会・ボランティア実践）に参加した。
- ・ 本校の生徒が分教室の授業（ワークスタディ・ライフスタディ）に参加した。

ウ 部活動交流

- ・ 本校の剣道部の活動に分教室生徒が参加した。

支援と留意点

- ・ 本校の授業に参加する形態の交流及び共同学習については、本校の授業者が教材を準備し、分教室の授業に参加する形態では、分教室生徒が教材を準備した。
- ・ 分教室の生徒の自主的な移動を促すため、目的の場所や展示物の説明が視覚的に理解できるように校内環境の整備を行った。

評価

授業担当者間の打合せにより、合理的配慮の提供についても大きな問題もなく進んでいる。交流及び共同学習の実施回数が多くなる中で、日常的な情報共有を組織的におこない、柔軟な運用をしていくことが重要になる。今後も情報の共有をしっかりと行いながら柔軟に対応していく方法を確立していく。

活動の様子



第2回交流学习にて、姫路別所高校の生徒が自己紹介を行っている様子。



共同学習（体育 バドミントン）にて、ダブルスのゲームを行っている様子。

事後学習

- ・ 学校新聞や学校説明会等で、交流及び共同学習の内容を伝えるとともに、その教育効果を報告することで、広く理解啓発を図った。
- ・ 12月の合同防災訓練では、避難訓練に加え、その後に実施した防災教育にも両校生徒が参加し、避難所のあり方についてともに考えた。
- ・ アンケートにて、交流及び共同学習の意義や効果の調査を行った。

成果と課題

- ・ 1 年全員に対して交流及び共同学習と事前指導を行うようになり、全員が互いの存在を知り、授業や行事と一緒に参加することが日常化している。授業では互いに教えあう場面も多くあり、また、普段から互いに話しかけたり、挨拶したりする生徒も多く見られる。交流の対象を全員にすることで、心ない発言をする生徒が出るのではという危惧があったが、これまでのところ見られず、障害に対する一定の理解が見られる。また、分教室生徒から教えられることで相手に敬意を払う生徒も少なからず見られる。これまでの取組は着実に成果をあげていると考えられる。
- ・ 分教室との取組は、前年度の踏襲で終わるのではなく、過去の反省を踏まえ内容の充実が図られている。姫路特別支援学校本校との交流は、両校の行事の都合上日程調整が難しくなっているものがいくつかあるが、前例にとらわれず日程調整を行うことで、発展的に継続できている。従来から、本校において、この取組に直接関わる教員は一部に留まっており、全体の取組になっていないという問題がある。また、部活動交流を含めると、交流及び共同学習の回数は200回以上になり、担当者でも全体の把握が難しくなっている。委員会で仕事を分担すると、さらに全容の把握が難しくなる。今後、全体把握の方法を検討する必要があると考える。